

# 理由を表わす接続詞「ガル」(γάρ)の用法

ローマ書 1 章 16～18 節において

●ギリシア語の接続詞「ガル」(γάρ)は、新約聖書全体で 1041 回使われていますが、ローマ書はそのうちの 144 回の使用頻度です。パウロの手紙はきわめて論理的な文章であるため、前後関係や文章構造を理解する場合には、接続詞の存在を意識することは重要です。とりわけ、今回取り上げるローマ書 1 章 16～18 節において、接続詞の「ガル」は 4 回使われています。それを正しく理解することはこの箇所をより論理的に理解する上で役立ちます。

●最初に取り上げる 16 節には二つの「ガル」(γάρ)があります。接続詞というのは当然ながらその前の文と密接な関係があります。ですから、まず 15 節を見なければなりません。そこにはパウロの強い決断の意志が記されています。原文を直訳すると、

「このようなわけで、私の切なる願いは、ローマにいるあなたがたにも福音を宣べ伝えることです。」

「このようなわけで」と訳された副詞の「ホウトース」(οὕτως)は、その前の 14 節で、「私は返さなければならぬ負債を負っている」というパウロの負債感から来ています。その「負債」とは「福音を宣べ伝えること」(「ユエアンゲリゾー」εὐαγγελίζω の不定詞)です。

16 節の二つの「ガル」(γάρ)は、15 節でパウロが私の切なる願いが福音を宣べ伝えることだということの理由を述べようとしているのです。

Οὐ γὰρ ἐπαισχύνομαι τὸ εὐαγγέλιον, δύναμις γὰρ θεοῦ ἐστὶν εἰς σωτηρίαν παντὶ τῷ πιστεύοντι, Ἰουδαίῳ τε πρῶτον καὶ Ἑλληνι:

(1) その第一の理由は、

Οὐ γὰρ ἐπαισχύνομαι τὸ εὐαγγέλιον

ない なぜなら 私は恥じる 福音を

「なぜなら、私は福音を恥とはしていないからだ」ということです。

「恥としない」というのは、福音は人間の理性にとってはつまずきとなる要素を多分に含んでいるからです。

(2) その第二の理由は、

δύναμις γὰρ θεοῦ ἐστὶν εἰς σωτηρίαν παντὶ τῷ πιστεύοντι,

力 なぜなら 神の である もたらす 救いを すべてに 信じる者(分詞)

「なぜなら、(福音は)、信じるすべての人に救いをもたらす神の力だからです。」

「信じるすべての人」を、パウロは「ユダヤ人、異邦人」という言い方で表現しています。

(3) そして、17 節にも「福音を宣べ伝えること」の第三の理由が記されています。

δικαιοσύνη γὰρ θεοῦ ἐν αὐτῷ ἀποκαλύπτεται

義が なぜなら、 神の ~の中に それ(福音) 啓示されている

「なぜなら、その(福音)の中には、神の義が啓示されているから」

「神の義」はローマ書を中心主題です。「義」は「救い」と解釈できます。

(4) さらに、18 節でも「福音を宣べ伝えること」の第四の理由が記されています。

Ἀποκαλύπτεται γὰρ ὀργή θεοῦ ἀπ' οὐρανοῦ

啓示されている なぜなら 怒りが 神の ~から 天

「なぜなら、天から神の怒りが啓示されているからです。」

何に對しての「神の怒り」かといえ、それは「不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に對して」です。(3)と(4)は「義」と「怒り」という語彙で、神の「救い」と「さばき」を表わしているとも言えます。つまり、反意的パラレリズムです。ちなみに、(1)(2)は統合的パラレリズムと言えます。

●以上のように、原文にある接続詞の「ガル」(γὰρ)を通して、パウロの切なる願いである「福音を宣べ伝えること」の理由を四つの面から、しかもヘブル的修辞法であるパラレリズムを用いながら、強調していることが理解できるのです。

●最後に、ヘブル語における接続詞の多くは「ヴェ」(!)だけで済んでしまうために、前後関係を理解することが必須となります。ところがギリシア語原文では、その前後関係を理解させるために多くの接続詞が用いられます。接続詞が(さらには副詞も)多様に用いられているということは、読み手に前後関係をよく理解させようとする意図があるということです。したがって、ギリシア語原文で読み解くためには、接続詞(副詞)を良く観察しなければならないのです。